

震災「キャラバン」の出番

小森 星児（復興塾塾長）<komori@kobe-yamate.ac.jp>

震災直後、これで神戸は10年遅れる、この遅れを取り戻すには官民挙げての支援が必要なのだという意見があちこちで聞こえた。右肩あがりの経済に慣れた人びとには疑念なく頷ける考え方で、いまだに震災前の指標と比べて復興は9割進んだなどの表現が使われることがある。

神戸復興塾は、発足当初からこうした国の支援で遅れを取り戻せという考え方に真っ向から疑念を呈してきた。すなわち「被災地は10年遅れたのではなく、10年先の世界に投げ出されたのだ。したがって高齢化、空洞化、財政危機、多文化共生など被災地が当面している課題は、10年後、全国各地で生じるはずの問題を先取りしている。今、神戸で学ぶべきは過去の震災の経験ではなく、日本の未来についての教訓なのである」と主張し、その教訓を伝えるために現場での研修や全国各地へのキャラバン派遣などに取り組み、最近では修学旅行の受け入れに力を注いでいる。

残念なことに、われわれの予測は的中した。しかし、こうした事態に対処するため提案したエンタプライズゾーンの設置やコミュニティベースのまちづくりなどの施策は、高度成長期の成功体験から抜けきれないハード優先の復興計画に押し流され、最近まで陽の目をみる事がなかった。震災5年の検証でも、できたものを数えることにばかりはなかったが、できなかったこと、失われたものについての検証は手薄であったといわざるをえない。

震災で失われたものはなにか。かけがいのない人命や、嘗々と積みあげられてきた財産はむろん貴重である。しかし、誤解を招きやすい表現であるが、こうした損失は保険や補償でカバーすることができる。耐震補強など、事前に防災、減災の対策を徹底することも重要である。

しかし、こうした仕組みでは取り戻せない無形の損失があることは見落とされがちである。個人、企業、あるいは公共団体などに帰属する資産の損失は数え上げることができるが、コミュニティが集団として伝承

してきた資産、たとえば景観や地域のアイデンティティなどは、一度失われると取り戻すことが難しい。

E.サイデステッカーは連綿と受け継がれてきた江戸の生活文化は、関東大震災の打撃から回復できなかったと指摘した。限られた狭い地域で多くの人がともに暮らす下町の環境は、洗練された趣味と独特の人情をもつ生活文化を醸成してきた。秩序や効率を重視する近代社会からみると時代遅れの非合理的な世界であるが、こうした下町のコミュニティは世界の大都市にいまなお存続し、革新的な文化や人びとを惹きつけるライフスタイルを育てている。

筆者は以前、神戸らしさをハイカラとかバタ臭さに求める皮相な考えに逆らい、芦屋、岡本、住吉、御影、北野、新開地、長田など多彩で独自の情緒をもつアーバンビレッジが並存しているのが他の大都市にない魅力であり、画一的で効率優先の震災復興事業がこうしたまちの個性や雰囲気を一色に塗りつぶす危険を孕むことを指摘した。残念ながらこの懸念は決して杞憂ではなく、復興の大義のもとで下町的な生活空間は郊外団地のそれに強引に再編成されることになった。

今、被災地を訪れる客人は再開の華々しい成果に幻惑されて、そこで失われたものの価値に気付かない。防災上安全で、効率的なまちづくりが目標であれば、それはそれでよからう。しかし、風土と歴史の絡み合いでかたちづくられ、生活のリズムを共有してきたコミュニティの価値を認めるならば、単なる建替えだけでは足りないことは自明であろう。

震災直後、被災地の実態を伝道する全国キャラバンから神戸復興塾は誕生した。まもなく震災10年を迎える今、再び全国を行脚して震災の教訓を訴える好機ではなからうか。往時のメンバーは足腰必ずしも万全ではないが、老躯に鞭打ってキャラバンに取り組みうではないか。幸い、若いメンバーも一騎当千のほうである。この際、最近になって現役を引退した復興事業担当者にも呼びかけ、充実したプログラムの提供に努めてはどうだろうか。

コラム 言いたい放題

星野イズムとはなんだつたのだろう。星野さん自身のカリスマ性や人間的な魅力ももちろんあるが、「イズム」というからには、「原理原則」が必要となる。それは、例えば「競争」であったり、「自己管理」といった目に見える尺度なのだからある。その時一番調子のいい選手を使う。誰の目にもはつきりと分かる尺度での選手起用。それが「原理原則」ということだ。しかし、それだけではない。星野イズムは、プロスポーツに必要不可欠な「闘争心」をチームに植え付けた。それは、誰もが口にするが、なかなかし得ないことなのだ。野村さんの場合は、野村イズムにはあつても、野村イズムにならなかつた。もちろん、タイガースの話であるが、「主義」の本語訳が「イズム」じゃない、なんてことはこの際言わないでね。その差はなんなのか。岡田監督が岡田主義ではなく岡田イズムを根付かせることができるのか。今年の戦いがその答えを用意してくれそうだが、今年も、タイガースから目が離せない。

塾勉強会中間報告

震災 10 周年をどう総括するのか、塾の視点は未だ定まっていません。しかし何かへ向けた手探りの動きとして、伝統の勉強会を 6 月から 2 ヶ月に 1 回のペースで再開しました。会場は島田ギャラリーをお借りして、火曜サロンと同時開催です。そのため文化的雰囲気の中で、市民の方々と刺激しあい、盛り上がっています。半年の経過を、独断コメント付きで報告します。(第 10 号で報告済みのシアトル紀行は省きます。)

「東海・東南海・南海地震等にいかに備えるか
～国や自治体の取り組みについてアレコレ思うこと～」6/27
室崎益輝

次の地震への取り組みの評価の視点

1. 阪神・淡路大震災の教訓が対策に生かされているか？震災の教訓の発信と継承について何を伝えるか？
自然のやさしさと厳しさ、人間の素晴らしさと愚かさ、被災の多様さと悲惨さ、被災の原因と減災の課題
2. 予想される被害の「最大限の軽減」を図りうるか？
時代に即した防災システムの構築をどうはかるか？
住宅再建支援制度の問題点、復興経済システムの問題点、防災協働の社会の問題点
耐震補強さらに環境共生へいかに転換するか？
木造密集市街地の問題点、安全につながる地域づくりの問題点 まちづくり+きずなづくり=地域づくり

〔人声人語〕

震災で亡くなった方々の、本当の死因を調べたか。「圧死」の 2 文字で済ませてないか。住宅の補強の必要を発信したか。東南海や関東への確かな知恵を伝えたか。根本を未消化のままにして、「復興」「市民社会」へと新テーマへ横滑りしてないか。地震時の行動を進言できるか。飛び出す？じっとする？住区毎の救出道具はそろえたか。じっと自分の足元を見てしまう。

地道に死因を追及している講師は「ハザードマップでおどし、大防潮堤をつくる動きは、公共事業の形を変えた促進策ではないか」と防災市民翼賛体制を見事に看破した。さすが、危険情報の公開や市民参加も、大型防災工事への総動員体制づくりかと、目から鱗。自律した(積もりの)市民と、それを取り込もうとする行政とは、常に攻めぎあいですね。息が抜けませんね。常に市民の情から発言してこられた講師の視野の広さと鋭い切込みには、毎回感心させられますが、これからは東京へ場を移して、世界へ発信なさることを期待します。

「新しいライフスタイルの創造者
- NPO の方向性 - 」6/27
大津俊雄

「公共財づくりと社会サービスの提供を誰に委ねるのが市民にとって幸せか」との命題を設定して、NPO の位置と方向を探る。それは NPO 自身の問題と、社会条件の問題の両方に規定される。

後者の行政力と市民力の国際比較では、「官が強大な日本 官民バランスの西欧 民が強い米国」の社会背景の中で、神戸市民はどの方向を目指すのが幸せか。事は小さな政府・地方分権・民営化・規制緩和・市場化・グローバル化など政治・経済の波にもまれて予測し難いが、「市場の失敗」への受け皿、セーフティネットなど、NPO への実力以上の期待だけは肥大化している。それを NPO 自身が受け切れるか。その条件としては、「気ままさと不安定さ」のトレードオフを克服して、社会化(公開、公平、安定性)を進めなくてはならぬ。もう供給側のご都合では済まされなくなる。米国で見たごとく、企業的成長は、初々しい創立精神の後退につながるかもしれない。

〔人声人語〕

各国の NPO を観察した講師は、草創期を卒業した日本の NPO へ問題を提起した(つもり)。期待が大きいだけに、小舅の小言が多い。

「行政の下請けを避けつつ、収益が安定して、世のため人のためになってやりがいのあるもの、ナアニ？」なんだか謎々めいてきた。NPO ならこの矛盾も吸み込んでくれそう。いやそんなうまい話があったら、株式会社にしていち旗揚げるわ(！?)。かくて NPO は空っ風の街道を、今日も独り股旅るのである。ところで神戸にまだ絶対的問題ってあるの？外へも目を向けようよ。

「神戸復興塾への期待」8/26
浦上忠文

「人間力」を作り出す強い潜在能力を塾は持っている。多様なメンバーが集まっている塾の財産は、次の 5 つです。「雑談力」「感動力=他者への共感力」「支えあう力」「喝采力」「人の流れを創る力」。

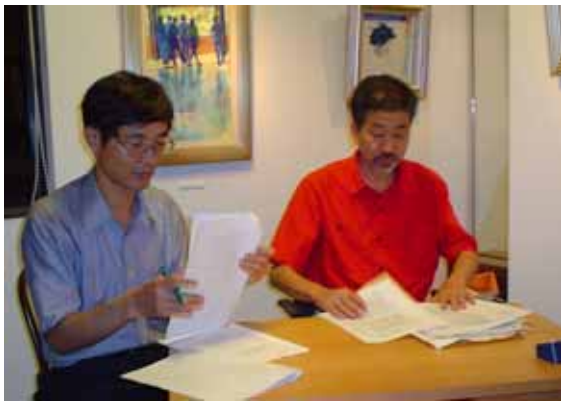
この財産を眠らせておくのはもったいない。これを活用して、行き詰った世の中のよどみを取り除き、新しい水路を創るため、「神戸の癒しの場」「神戸人間力の創造の場」として、「居酒屋・神戸復興塾」を開店しようではありませんか。

〔人声人語〕

塾からサンフランシスコの NPO を見学して驚いたのは、夕方から開いて定員数名の兼業の議員が並んで住民の意見を聞いている議会風景だった。欧米の地方議員は行政の管理者である場合が多いので、これでいいのだろう。では日本国の三権分立に似せて作った神戸の地方議会の役割は何で、こ

れだけ専門の定員が多いのに何故市民の意見が通らないのか。もう税金払わんぞ。これを直すには地方分権・自治を根底から変えないとダメだ。でっかい枠組みで従来型選挙に一喜一憂を続けるのか、身の丈でだけ行財政能力のある基礎自治体（仏コミュン、英パリッシュ、蘭ムニシパリテ、独ゲマインデなど数千人規模で色々）の日本版を神戸から本気で作るのか。

講師は市会議員で、閉塞した時代を横からの風穴とユーモアでいつもブレイクスルーしてくれます。その感性は代議制民主主義の閉塞に気付き、参加民主主義を求めているようです。塾の多様性と交流性は、「小都市」になりつつある。そこで夕方から始まる議会に蝶ネクタイで現われて、市民にサービスしてくれる新しい議員第1号に彼はなってくれる。市議会が身近なパブのごとくにぎやかで楽しい語らいの場になる。夢は尽きない。我らが新庄@神戸のダンディズムに乾杯！



「震災後8年間で感じたこと」8/26 上田耕蔵

震災後はカルチャーショックの連続だった。我々医者は、患者さんのくらしから遊離した場所で医療をしていたが、地震は社会と医療事務を結びつけてくれた。例えば密集住宅が壊れて日照が良くなったので、喘息が治った事から思い知らされた。

- ・高齢者型震災だった：震災後の高齢者は内科の病気、特に精神的ショックで亡くなっている。
- ・震災における住宅と福祉の経験：住宅（プライバシー）と施設（ケア）の両機能だけでは生き甲斐のある生活は必ずしも実現できない。
- ・特別養護老人ホームふたば：計画の骨子は、個室化、ユニット化、地域化。「住み慣れた地域で家族のように暮らす」を特養で生かしたい。入居者とスタッフ間の人間的交流とそこでの役割づくりが必要である。
- ・震災より世の中の変化のほうが大きかった：震災の評価としては「自立と支え合い」を教えてくれたことが最大であった。震災の変化が、社会変化の波のスピードにのみこまれてしまった。
- ・市民活動と助け合いの構造
東洋的文化：共同体（家庭・地域）の再興 震災は家族と地域の衰退を防いでくれた（歯止め）
西欧的文化：個人（市民社会）の時代の到来 各人バ

ラバラの段階で、助け合いを必要とした（逆行）

〔人声人語〕

講師は、震災によって最も脱皮した医者ではないでしょうか。地に足を着けた知識欲の広がり、男女のエロス、心理、脳、人類のテーマにまで到り、留まる所を知らない。テーマの発展の意外性は抜群。医者にしておくのはもったいない。「震災文化人類医学」の暁・開祖。

さて産業革命が成功した英国では、人口の都市集中がおこり、スラムやコレラが発生し、その対策としての公衆衛生・救貧・住宅の施策が、後の都市計画法の成立（1909）に発展しました。つまり、まちづくりの母体はスラムの公衆衛生だったのです。

各人がバラバラになった社会が被災して復興して、さてどの形で人を再編するのか。醤油の貸し借り話をいつまでも美談とする「生活の基礎的助け合いモデル」を超えて、地域・社会での人間関係はどうあるべきか。同音異義的に使われているコミュニティという消化不良の言葉を、も一度腹から出して手術してもらい必要がありますね。名医御成り！

「旅を考える～交流と情報・人の結節する都市、巡る意味について」10/7 山田和生

マスツーリズムに対するオルタナティブツアー（AT）

- ・目的地別特化...アフリカ専門、インド専門、
辺境専門、山専門
- ・コンセプト特化...AT
例：カンボジアの寺子屋やキリマンジャロの貧しい村でのボランティア、
ハワイ先住民の町おこし、
韓国パンソリを聴く会等
- ・AT参加者属性...女性、20代、学生とOL
- ・AT参加動機...「自己向上」「本当の自分探し」
積極性向上、社会性向上、世界への視野拡大
自己能力が成長（逆に違和感を覚えた者は、
内向的回帰傾向、自分の生活に満足化も）

〔人声人語〕

講師は旅行会社の代表ですが、世界の動きを横目でにらみながら適切なツアーを打ちつけてきました。これはNPOと言う言葉すらない頃からのNPO活動です。儲かってないようだし。マイノリティー文化の伝承と迷える若者の交流の演出は、まさに「バーチャルなまちづくり」です。

ATの参加者が20代の女性と聞いて、オジサンも急に参加したくなった。自分探し？

「見えない都市遺産」
～震災復興現地体験型修学旅行～10/7 森栗茂一

- キーワード「修学旅行、エコツーリズム、コミュニティ、災害、伝承、無形遺産」
- ・持続可能な観光...地域社会の人が固有の地域資源を活用して生み出す自律型観光
- ・修学旅行...出自は兵式体操の行軍が遠足になり、現地発見型学習を取り入れたもの。

- ・効果の期待・・・歩く・見る。聞く中で参加者自らが発見していく自律観光型修学旅行。
- ・都市災害に関わる記憶・経験の伝承教育。高齢者は重要な資源。老若の交流が、新しい防災経験を生む。
- ・受入地区...長田区真陽・新長田南・御蔵・野田北部中央区吾妻。
- ・今後...無形遺産(地域の伝承、暮らし方、災害の記憶)を生かす自律観光は、外部に開かれたコミュニティーに支えられ、また逆に自律観光がコミュニティーを開かせる。
- ・まちづくりのコンセプト...定住者を前提とした様々な施策を考えるのではなく、その町が好きで交流し訪れる人たちや、色々な人が移動し常に交流を深めていくような事を前提とした都市のあり方が求められる。

〔人声人語〕

講師は塾の人間機関車として、ポスト復興の中だるみの活動を牽引してくれる。「交流が都市の基本だ」「人とコミュニティーのつながりも無形遺産なんだ」と言う珠玉の言葉は、さすが都市民俗学者であり、我々に都市で生きる勇気を与えてくれる。そうだヘリテージは築くものだ。都市の復興とは交流の復興だ。神戸は復興したか？我らが機関車ザトベックがんばれ！（アレ、この名前はもう伝承してないかな？）

「復興は農業やで」2/17

大村和志(オーガニック百姓・四万十有機農業者ネットワーク)

- ・お百姓とは「百の仕事ができる人」であり、農民だけを指す言葉ではない。(網野善彦先生も同じ意見)百姓は、災害にも、不況にも強い。震災でもびくともしない。
- ・オレの白菜はうまい。無理に大きくしていないからだ。その植物が元々持っている生命力を尊重しているだけだ。でもそのための手間は、半端じゃない。分かる人に食べてほしい。オレは野菜と言うメッセージを運んでいる。物の受け渡しの中で、顔の見える関係を築く。

「食べる事としての生きる力の復興を」2/17

増田大成(NPOひょうご農業クラブ代表)

- ・日本の雨と四季は、農業に世界一適しているが、農地は1/4しか活用されておらず、食料自給率は30%に過ぎない。しかも食材の30%は廃棄されている。日本は食料輸出国になるべきだ。
- ・「自産自消」の時代が来て、三等分農業(専業・兼業・自産自消)となる。
- ・有機無農薬で作っている人は少ない。スーパーで有機野菜があれだけ並ぶはずがない。
- ・相生での産品を六甲アイランドの朝市で捌いて、後は八百屋とレストランを開店して捌く。そこで子ど

も野菜クラブを作っており、好評だ。ここ30年来の肉食化を元へ戻したい。

- ・NPOのコミュニティビジネスの神髄は、社会的リソースをいかにコーディネートできるか、である。
- ・暮らしと地域の再生には「食べることとしての生きる力」を回復しよう。更に農業にまで遡って行こう。食と農業はこれまで、作る側の問題だったが、今や食べる側の問題であり、暮らしの問題、町の問題である。まちの中にむらを作ろう。

〔人声人語〕

- ・大村講師は、長田の復興に尽力された元塾生です。アートのアグリを四万十から発信しています。
- ・増田講師は元コープ神戸に勤めておられ、「消費者と生産者、マクロな農政とミクロな農家」の両方を見てこられた経験に基づく問題指摘をし、小気味よいキーワードで挑発してくれました。レストランまで開店した発展的取り組みには脱帽します。君は見たか、このリタイアパワーのすごさを。
- ・不健康な都会人は、百姓の話に足元から揺さぶられ、X線透視された気分です。もう少し早くお話を聞いておれば、復興のあり方も違ったかな。ロンドンの大火は石造りの街を作り、シカゴの大火は公園を作りました。神戸の地震は？住宅ばかりでなく農地の楔を入れても良かったのだな。エコロジーを組み込み得なかったのも残念。クラインガルテン(ドイツの都市内貸農園で、小屋もあり泊まれる)の導入のチャンスでもあったのだが。
- ・お二人の産品で料理した野菜のうまさに、お話の中身は忘れてしまいました。でも野菜のメッセージはドーンと伝わってますよ、胃に。脳まで昇るかな？



大津俊雄 <QWM10761@nifty.ne.jp>

日中交流・復興クルーズ2004



パンフレットができました。

日中交流・復興クルーズ 2004 のパンフレットができました。神戸港出航から 13 日間の行程を、すごろく風に描いたビジュアル系のパンフレットです。復興クルーズの『おかかえ絵師』川浜さんのご協力で、素敵なイラストがいっぱいです。川浜さんは、似顔絵とイラストの達人、今回のクルーズで天津往復で乗船する燕京号の関係者です。

さあ、これから 8 月 13 日の出航に向けて、一人でも多くの人に、このパンフを届けて、見知らぬ人との新しい出会いと交流を創り出したいものです。

パンフレットと同時に「復興クルーズの趣意書」の中国語版の翻訳も完成しました。これで、受け入れ先の天津・唐山の人々にも、クルーズの内容を届けることができます。

日経新聞の記事(2月5日付)も読みやすい A4 サイズにまとまっています。「中国・唐山地震被災地を今夏訪問。兵庫の子供ら防災学ぶ旅へ」と題するこの記事は、日経の記者が実行委員会に参加して、じっくり取材して書き上げました。

パンフレットと、趣意書と、新聞記事。この3点をセットにして、クルーズに関心のある、一人でも多くの人に届けたいものです。「パンフレットを置いてあげてもいいよ」というスペースを知っている人、復興クルーズ事務局にご連絡ください！「関心のある人に配ってあげてもいいよ」という人、復興



クルーズ事務局にご連絡ください！すぐに郵送で、お届けします。

ホームページができました。

ホームページにも、イラストがいたるところに顔をだします。現地の画像もたくさんアップしました。復興クルーズへの夢が広がる楽しいページができあがりしました。もっともっと情報をいっぱいになりたいと思います。クルーズの準備が進めば、どんどん新しいお知らせや案内を掲載します。ぜひ一度、復興クルーズのサイトをご覧ください。

(<http://www.myticket.jp/FUKKOU001.html>)



私たちは決してあきらめません

「復興クルーズ 2004」は、はじめ「2003」としてスタートしました。2003 年。それは神戸市と天津市が友好都市になって 30 周年を迎える記念の年でした。

ところが、春に発生した新型肺炎 SARS が天津や唐山を襲い、人々は大変な苦しみを味わいました。楽しみにしていた復興クルーズも延期となりました。

こんなわけで、「復興クルーズ」の「復興」は、震災だけでなく SARS という「災害」からの「復興」も意味するものになりました。震災も病気も、はげまし合って乗り越え復興クルーズ 2004 は「31 周年記念」として再スタートをきりました。

ところが、今年は 1 月から鳥インフルエンザが登場し、私たちだけでなく、受け入れ側の天津、唐山の人々も本当に心配していました。

『中国農業省は 3 月 16 日、鳥インフルエンザの制圧を宣言した。発生地区 49 カ所の封鎖は同日までにすべて解除された。これにより、1 月下旬に発生した中国の鳥インフルエンザは終息した。(時事通信)』

この報道は、私たちにとって待ちに待ったうれしい知らせです。2002 年から準備を続けて 3 年目。復興クルーズが出航するまで、なにがあっても、私たちは決してあきらめません。

Never Never Never Surrender

日中交流・復興クルーズ 2004 事務局

山田和生 <yamada@myticket.jp>

NPO やボランティアなグループを支援する助成団体がずらり。

アート・サポート・センター神戸、木口ひょうご地域振興財団、近畿労働金庫、しみん基金・こうべ、日本財団、はぁ～とふるふぁんど委員会、ひょうごボランティアプラザ、松下電器産業（環境サポーターズ マッチング基金、子どもサポーターズ マッチング基金）の8団体が兵庫のNPOの相談に乗った。会議室を8つの島に分けて、相談を待つことしばし。チラホラ、パラパラと最初は様子見にのぞく人たちだけだったのが、どんどん、お客さんがやってきだして、順番待ちの席もでるといううれしい状況まで生まれた。

これは2月25日、神戸中央区のラッセホールで行った「ひょうご・まち・くらし研究所」の設立第一歩のイベントの様子。

助成相談会と名付けた催しは、この日の催し全体のほん一部だったが、「果たして相談にやってきてくれるだろうか」との心配をよそに、来場者一人あたりの相談時間も長く、熱のこもった会話が続いていた。

ひょうご・まち・くらし研究所（くらし研）は1月20日にNPO法人の認証を受けた。目的としている事業分野は神戸まちづくり研究所や神戸復興塾ときわめて近く、気分としては弟か妹分といったところ。新米のNPOをどうか導いてほしい。

くらし研がめざしている仕事は、まちづくりやコミュニティビジネスを志すグループと一緒にあって、社会調査の技法設計や開発をしていこうと計画している。例えば、どんなグループでもよく実践するアンケート調査を、当初から目標とするものが抽出できるよう設計段階できちんと考えていくことなどが私たちの仕事となる。

くらし研は正式発足に当たってどんな催しで世間にごあいさつするかをいろいろ検討した。こうし

た組織のスタートに打つイベントは先例もあり一定のルールめいたものがある。あれかこれかと内容をめぐって幾度か、会合を開いてきた。結論は、自分たちがPRしたいこと、言いたいことは、逆に世間はだれも聞きたくもないだろうというベシミスティクというか“大人びた”気持ちから別のプランをつくっていった。

いまNPO界で大きな課題となっている事柄を取り上げてみよう。NPOのみなさんに役立つテーマを探そうと知恵を絞った。その結果、NPOやNPO的活動を予定しているグループや個人にとって、大きな関心事はやはり安定した財政基盤づくりのであろうと考え、NPOに資金やものを提供する助成団体との交流の場を設定することに落ち着いた。

先に述べた相談会をスタートに助成団体からのメッセージ、助成団体とNPOをめぐるパネル討議、そして夜の交流会と欲張りなプログラムを設定した。

パネル討議は小森星児塾長（くらし研顧問）をコーディネーター兼コメンテーターにお願いし、黒澤司・日本財団ボランティア支援部長、木口一郎・木口ひょうご地域振興財団専務理事、ジーナ・サケッティ・松下電器社会文化グループメンバー、古田篤司・新開地まちづくりNPO事務局長の4パネリストで行った。

パネル討議では、助成団体がなぜNPOを支援しているのか、その意味合いを相互に理解し、ともに新しい社会をつくっていつているのだとの共通理解がなければ長続きしない、助成団体とNPO側とで、どこで考えや意識の差異が生まれるかなどを本音で議論できたのではないかと関係者に感謝している。

発足を記念するイベントが終わってよいよ新年度から本格的に活動を始めたい。みなさんの応援をお願いします。

山口一史 <VEN15142@nifty.com>

神戸まちづくり研究所・神戸復興塾活動記録(2004/2～2004/3)

- 2/ 4 NPO 育成支援アドバイザー派遣事業後期報告会
- 5 NPO と神戸市の協働研究会世話人会[24]
- 14 第2回明舞まちづくりサポーター会議
- 16 日中交流・復興クルーズ2004実行委員会
- 17 神戸復興塾勉強会
- 23 修学旅行受入ものづくり大学説明会
- 24 修学旅行豊正中学校下見、高羽地区・六甲北地区説明会
- 25 ひょうごボランティアプラザNPO 応援貸付制度現地調査受入
- 3/ 1 ひょうごボランティアプラザNPO 応援貸付制度審査会
- 3 修学旅行受入原田地区説明会・中央区東部婦人会説明会
- 4 ラジオ関西「おむすびほっかほか訪問」企画委員会[24]
- 6 行政・NPO 協働助成(HVP)豊岡ワークショップ
- 9 生活復興県民ネット地域活動ステーション説明会参加

- 3/10 NPO と神戸市の協働研究会世話人会[25]
- 12 日中交流・復興クルーズ2004実行委員会
- 16 行政・NPO 協働助成(HVP)篠山ワークショップ
- 17 修学旅行受入高羽地区打ち合わせ
- 行政・NPO 協働助成(HVP)ヒアリング
- 19 さいたま市からの市民活動総合支援拠点視察受入
- 20～21 行政・NPO 協働助成(HVP)東京視察
- 24 修学旅行受入河原地区打ち合わせ
- 26 会計処理について公認会計士と相談
- 27 明舞団地まちづくりワークショップ報告会
- 29 修学旅行東港中学校下見、雲中地区打ち合わせ
- 30 生活復興のためのNPO活動支援事業公開報告会

平成 15 年度 N P O 支援アドバイザー派遣事業報告書

神戸市より緊急地域雇用創出特別交付金事業をうけ、NPO の情報発信力・組織基盤強化を目的としたアドバイザー派遣事業が終了いたしました。前・後期あわせて 25 団体に、8 名の方々がアドバイスに携わった現場の報告をいたします。

平成 15 年度新規雇用者数

アドバイザー 7 名(男性 3 名、女性 4 名)、コーディネーター 1 名(男性)

派遣期間

1 年間を前期 6 月～10 月末、後期 9 月中旬～2 月中旬の 2 期に分け、派遣を行った。事前研修や報告書作成などの期間があるため、実質派遣期間は 1 期で約 4 ヶ月になった。

派遣団体

申込数 28 団体 派遣 25 団体(NPO 法人 8、任意団体 17、社会福祉法人 1、社団法人 1)

派遣できなかった団体 3 団体 *アドバイザーは派遣できなかったが、その解決策については提言した。

アドバイスした団体の現状

団体が責任のある市民組織として、より自立をしていくための課題について、課題を取り巻く背景や原因の確認、団体の資源の確認から行わなければならない団体が多く、まずはその支援を業務に加える必要があった。

アドバイス内容

P C 技術

Word 操作 : 5 Excel 操作 : 2 Access 操作 : 3
Outlook Express 操作 : 1 PC 環境整備支援 : 16
その他 : 1

情報発信

ホームページの作成・更新・活用支援 : 16
広報一般 : 1 機関紙編集リーフレット作成支援 : 5

組織マネジメント

組織運営相談 : 3 事業計画書作成指導 : 5
会計指導 : 9 データ管理 : 6 その他 : 1

団体への成果

- ・ 経理・IT・組織運営マネジメントの指導を受けて、滞りがちだった実務がスムーズに進むようになった。
- ・ 指導を受けてから、団体が持つ課題への取り組みに自発的な動きが見られてきた。
- ・ 指導中に得た知識を基に、まず自分たちの資源を活用してみようとする解決力がついた。
- ・ 市民組織としての責任感、団体メンバー間の連帯感が強化された。

アドバイザーへの成果

アドバイザーが派遣期間中に得た知識、スキルを、事業終了後も活用・発信している。また、市民組織に触れて、市民活動への理解が深まり、何らかの形で参画している者もいる。

アドバイスの現場から見てきたこと

NPO は、企業や行政に比べて明らかに資源が限られているので、今ある資源を無駄なく活用していくマネジメント力が緊急に求められています。しかし現場は、目先の出来事にとらわれて問題を先送りしたり、事実を見ることを忘れてしまったりが現状です(私もかつてその体験があるので理解ができる)。

そういう傾向がある中で、アドバイザー派遣を依頼してきた団体は、組織強化への意識が高いといえると思います。ならば、この機会を利用して、アドバイザーは PC、経理、情報発信などの専門的スキルを落とすだけでなく、団体内だけではなかなかすすまない(認めにくい)課題の原因検証をともに体験し、課題解決へのアクションを起こすきっかけ(覚悟?) を作ることを意識していかなければなりません。

したがって、アドバイザーといってもその役割は、インストラクターでもあり、インタープリターでもあり、ファシリテーターでもあり、場や相手の要望によって使い分けをしなくてはなりません。現場経験のない、たった 5 ヶ月間だけのアドバイザーがその役割を巧みにこなすことは大変難しいことで、期間中は苦勞の連続でした。しかし、(後期アドバイザーの岸友輔君の所感を引用しますが)派遣先団体の方の背後にはたくさんの受益者の方々がいるということを常に意識し、団体と共に責任を持って努力するアドバイザーの態度は、団体には好評で、問題が即解決にはつながらないまでも、自立への意識を高めるきっかけに十分だったと確信を持っています。

NPO 支援だからといって、市民組織の理想と責任を押し付けてはなりません。また、こちらからの一方的な情報発信やスキル伝達だけでは、団体の組織力強化につながりません。NPO 支援は、NPO の背景を理解しながら、受益者と団体のミッションとのコミットをファシリテートしていくことといえます。時には介入しなければならないこともあるし、放任していても大丈夫なときもある、団体やそこにかかわる人たちに温かい関心を失わずに、シビアに見極めができることは、何も NPO 支援に携わるものだけが持つべきスキルではなく、NPO スタッフや援助職、大げさに言うと、人に携わることを仕事としている人々に求められていることかもしれないと思います。そういう意味では、アドバイザーという職業は、どの方にも大変貴重な体験だったと思います。

自立に向かって惜しみなく努力し続ける団体に出会えたこと、またそれに答えようと真剣にかかわってくれたアドバイザーさんに感謝します。

まち研事務局 東末 真紀 <LET07723@nifty.ne.jp >

まち研ニュース 9号

復興10年と「当事者」について考える

田村 太郎（神戸まちづくり研究所・理事）
< CQJ01425@nifty.com >

3月末を持って多文化共生センターの代表を退任した。同センターは地震発生直後に外国人被災者への多言語での情報提供を目的として活動した「外国人地震情報センター」が母体となって、1995年10月に発足。現在は、京阪神の他、東京と広島でも地元の人々が外国人支援の活動を展開するNPOとなった。発足当初からこの団体に居合わせて、NPOによる地域課題解決の可能性と限界をたくさん学ばせてもらったが、ここ数年は力をつけている当事者コミュニティや専門能力を持つボランティアへのサポートを通じた間接支援が増えてきて、課題や対象とする人々の力の回復にあわせたNPOの側の変化も必要だと感じた。とくに「当事者」ということばにはここ数年、敏感になっていた。

そんなおり、3歳を目前としていた息子が小児ガンと診断された。「神経芽細胞腫」というらしい。そんなの、私は聞いたことなかった。初めはガンということもわからなかったが、説明を聞いているうちになんとなく理解できた。診断から2日目にして、抗ガン剤の投与がはじまった。いろんな同意書にサインをし、24時間の付き添いも求められた。さらに追加でいろんな検査が行われたが、それぞれの検査がなんの目的で行われるのかも、ちんぷんかんぷん。その結果も随時発表されたが、「とにかく悪い」ということ以外、よくわからなかった。治療も一応の国際標準はあるものの、日々の判断は付添人にゆだねられる。熱が出て原因は特定されず、「解熱剤はどうしましょうか？」と医師から聞かれても、どうこたえたものか。

ふと、震災直後を思った。突然の被災、避難所での生活。「り災証明書」とか耳慣れない言葉の洪水に疲れていると、外から「がんばろう」といわれたり、復興計画はどんどん決まっていったり。当時伊丹に住んでいた私は、自宅が多少損壊しただけ。祖

母の家は全壊したものの、身内に死者はなかった。直後から外国人への情報提供に奔走はしたが、自分は外国人ではなかった。私はいつも「当事者」ではなかった。それでも神戸復興塾や当研究所での活動で、復興の過程にもそれなりに参画してきたが、それは当事者ではないが同じ揺れに遭遇し、被災者のすぐ近くにおいて、何が必要かわかるからこそ行動できた、とっていた。

どうやらそれは思い上がりだったのかも、と息子の付き添いを通して考えるようになった。同じように付き添っている家族と話しているときや、先に退院したり子どもを失ったりした人たちがつくる「家族会」に出席したとき、私はいままで味わったことがない解放感を味わった。当事者には、当事者にしかわからないことが、やっぱりある。研究者や専門家でなく、当事者自身が声をあげ、サービス提供者となり、また制度を変える提言者でないといけないと思った。

しかしこの解放感は、ときに当事者でない人には排他的とうつる。私自身、外国人支援をフィールドとしてきた日本人として、ずっとこの疎外感を感じてきた。では、専門家や研究家は不要かというところではないように思う。当事者がそうした行動を行うための道具や資料を提供する役割を負っている。医療でいえば患者や家族と医師との間に、被災地では被災者と行政の間に、知恵袋となり通訳となる役割は、当事者にとってあった方が良い。

あの日以来、「毎日が震災」のような9年間を過ごしてきたが、多文化共生センターの退任を機に、また震災10年を前に、もういちど当事者とは何か、当事者にとって復興とは何か、まち研のメンバーの一人として、考えてみたいと思っている。

（本稿は、神戸まちづくり研究所ホームページのリレーエッセイ2003年12月号掲載文に加筆修正したものです。）

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所・神戸復興塾

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号 TEL: 078-230-8511 FAX: 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = <http://www.netkobe.gr.jp/machiken/>